

病院を去らんとして

(夫 へ)

水野 仙子

つい此間まで折々宵の雨の春雨らしいのに聞き入つてゐるうちに、いつの間にやら雪を伴つて、思ひがけぬ白い世界に目覺めを驚かされてゐましたが、其中にも少しづつ／＼残されて行つた温かさに、北國もやはり春の光の中に草が萌やしてゐます。風こそ少し冷たいけれど、今日も日は麗に照つて、久々で池の面に金魚や緋鯉の脊が浮んでゐます。何となく耳にたつ雀の聲にふと寢床から首を延してみると、一羽の雀が今しも汀に下りて怖々水に嘴をつけると、仰向いてそのふつくらとした胸をつき出して嚙み下してゐるのでした。とそれで其水加減に安心でもしたやうに、今度はもう少し水際に進み寄つてぼしや／＼と一浴び(音はしなかつたやうだけれど)あびて上つて行きました。其そ／＼つかしいやうなおどけたやうな様子に思はず微笑んでゐると、今まで芝生の上や木の枝に止まつてチ／＼とそれを見てゐた五六羽の仲間が、吾も／＼ゐ交る／＼下りて来て、皆一様に最初の者がしたやうに初め一口嚙んでは小さな

飛沫をたてゝ水を浴びて行きます。みんな如何にも元氣で嬉しさうで、「あゝ春が來た！春が來た！」とでも言つてゐるやうに見えます。

ほんとに春が來たのですわね、いつものやうにそれを來べき時になつて來たのでせうけれど、私は長いことかゝつて漸くこの春に巡り會つたやうな氣がします。ほんとにどんなに／＼待つたでせう。温室の外に出されても、人工的な温度や神經質な防寒具のお世話にならずとも、恵の化身であるやうな暖かい日光の中に私の生命それ自身の營みを爲し得る春を！さうして今や漸く私の温室の戸は外に向つて開かれようとしてゐます。いよ／＼此月いづばいを限りに、半年餘の間私を保護した病院——それは私にとつて牢獄でもあれば又温室でもあり隠れ家でもあった——に暇を告げようとしてゐます。

其悦びを心密かながら、私は深く／＼天に向つて感謝し、さうして徐に其の頸を貴方を初め一方ならぬ心配と厄介とを掛た家の人達の前に向けようと思ふ。けれどもそれは言葉もないたゞの默禮に過ぎないけれど、どうかそれによつて私の感謝の意が表はされないものとは思つて下さいますな。私の爲めに何かと心を注いで下さつた

方々に對するたゞ一つの十分なる感謝は、こゝまで快くなつてまた體を猶一層確なものにする事より外にはないのですもの。

かうして今ともかくも病院生活の終りにプンクトを打たうとして其長かつたやうな短かつたやうな間の事を考へてみますと、ついうつかり餘ちに無爲に過ごしたといふやうな考へがふと覗いて來ます、けれどもそれは、第一の目的であり仕事であつた壞れた體の改造、そしてそれが兎も角成し遂げられたといふ大事なことをうつかり忘れたからの事で、思ひ切つて馬鹿になつて、成るべく無神經になつてと折角努力したのだものと思はず苦笑されます。且つ又此病氣によつてどれだけ私達の精神にいゝ霑ひを得たか、そして其霑ひによつてともすれば荒地のまゝで残らうとしたお互の間の愛が如何に開拓されたか、それをも大きな恵として記念し感謝しなければならぬのでした。さうして私自身の力をもつて爲し得たものとは何もない。たゞ病者に對する周圍の人達の寛大に乗じた我儘と、病人の虚榮と（病人には病人らしい虚榮があるといふ事を私は初めて知りました）この二つだけを際たゞ（原文ママ）したに過ぎませんでした。

けれども或はお薦だけは私の病氣

の爲めに或利益を（若しもさういふ事が出来るならば）得たかも知れませんが、彼女は兎も角假令假名だけでも字といふものが讀めるやうになりましたから、貴方も御存じの通り一寸可愛げのある彼女は十六で全くの無智文盲でした。彼女が私の傍に附いてるやうになつてからの一月二月は、私の方に大分手が掛つた爲めに退屈もしなかつたけれど、そら貴方がいつかお出でになつてゐた時の夜、彼女が火鉢の前にぼつねんとしてゐるのを御覽になつて、

「お薦は新聞は讀まれないのかい？」とお聞きになりましたね。其時彼女は「いゝえ。」と言つて恥かしさうに俯向きました。其時の事が妙に頭に残つたものだから、或時私もふと思ひ出して、

「お薦は何年まで學校に行つたの？」と何氣なく訊きました。彼女は一寸黙つてました。私はまた繰返して問ひました。ところがどうでせう、其質問は彼女の痛手だつたのです。

「學校さなんてちつとも行かなかつた」と少し腹だゞ（原文ママ）しさうに顔を赤くしてました。

で私も其上聞きたゞすのを憚つて黙つて了ひましたが、ふと見ると彼女は火鉢の前に坐づ（原文ママ）てしく／＼と泣いてゐるのです。私は何だか

自分が悪い事でもしたやうな氣がして
彼女が可哀さうになりました。

あとで姉に聞いて見ますと、お薦は
十四の時に家へ下女となつて來たので、
それまでは村で子守などばかりさせら
れてゐたのでした。昔は村でも金持ち
の部に屬した家だつただけれど、何
かですつかり駄目にしてしまつて、彼
女が四つか五つの時分に一家は北海道
へ出稼ぎに行つたらしいのです。けれ
ども其處でも旨く行かなかつたものと
見えて、間もなく村へ歸つて來ました
が、折悪く其頃學齡に達した彼女は、
學校へ上げる眞似もされずに彼方此方
と連れ廻られ、十一二の頃から子守に
やられて、何一つとして教へられる事
がなかつたのでした。昔家がよかつた
時分に人となつた彼女の叔父に當る男
などは、大學までも修業が出來たに係
はらず、（併し悼ましい事には彼は狂
人となつて、今だに流暢に讀み得る
獨逸語も、造詣の淺からぬ漢學も、何
に役立たす道もなく此町を流浪してゐ
る）彼女といつたら全くいろはのいの
字も縦にも横にも棒を引つ張る事すら
も知らない程なのでした。

漸く今は姉の丹誠によつて、ものを
縫ふことゝ、極簡單な勘定と、片假名
も三分の一位は覺えてゐるかも知れな
いとの事、それは姉もせめていろはだ

けでもと夜な／＼教へ出したのですが、
何しろさういふ事に馴らされてゐない
頭の事とで、根が決して馬鹿ではない
のだけれど、其覺え憎い事といつたら
自分でも情ながる位で、五つ六つの子
供を教へるよりは遙に骨が折れるので、
旁忙しくもありつい其儘になつてゐ
るといふのでした。

そこで私は早速企てました。私は或
る樂しみをすら覺えながら厚紙を刻み、
それに糸を通して單語カードの様なも
のを作り、四十八字の假名を一枚／＼
に書いて、裏には繪をかきました。た
とへばうには馬、くには車といったや
うな風に。私のかいた繪が可笑しいと
いつてお薦は笑ひ出しました。彼女は
さういふものによつて字が覺えられる
とは思はなかつたのです。私は先づ字
が讀めないと不便な事、兎も角二様の
假名を四十八字だけ覺えればものが讀
め、それで用が足りる事を説明しまし
た。所が彼女にはどうしてもそれが信
じられないやうな風でした。彼女にと
つて文字は非常に高遠なものであり、
且つ數限りもなくあつて、到底自分な
どが覺えきれるものではないといふ觀
念が彼女を脅かし、臆病にさせてゐ
るらしいのでした。私は彼女を其考へ
から誘ひ出さうと思つて、四十八だけ
字を覺えれば手紙だつて書けると言ひ

ました。彼女は猶半信半疑の躰でその不思議なカードを弄くつてゐました。

其時から早速二三字づゝ書き方を初め、カードは隙ある毎に見てゐるやうにと渡しましたが、成程彼女には骨が折れる模様で、自分でもどうかして覺えたいとは思つてゐながら、初めの間は假令火鉢の前でぼんやりしてゐるとも自分から進んで初めようとはしませんでした。そして時々、

「眞實に是だけさへ覺えたら、新聞も讀めるし、手紙も書かれるんですかい？」と幾度か念を押すのでした。

自分は何も知らぬといふ事を、私に打出して了つてからは彼女も樂になつたと見えて、時々いろんな事を訊くやうになりました。段々と驚いた事には、彼女はまだ時計の見方も完全に知らなければ、今日は何月の何日であるかさへも知つてゐないのでした。そしてそれを教へるには根本から、時計ならば分と秒との説明から、又は一月は何日で一年は何ヶ月あるといふ様な事から初めなければならぬので、おつたにかゝつては私もすっかり先生になつて了ひました。或時朝日がどつちから出るかと聞いてみたら、彼女はそれでも東の方を指さして、

「あつち。」と答へました。

「あつちつて何方？」

「あつちつてあつち。」

つまり東も西もまだ彼女の頭にないのでした。それから日は必ず朝東から昇つて西に沈み、其左右が南北といふのだと言つて聞かせると、感心してきいてゐたつけ、やがて首をかしげて、

「したがお日様なんて伶俐なもんだな、さうして東だの西だのつて知つてゝ自分で昇つたり引込んだりするんだもの、おれよりよつぽど伶俐だ。」といふんです。そして私が笑ひ出したら自分も一緒になつて笑ひ出しました。

大分お薦の話で長くなりましたが、其お薦が此頃は俊ちゃんあさの古雑誌を漁つたり、讀賣の「こどもしんぶん」を拾ひ讀みしたりするやうになりました。此節の様に夜泊つて朝歸つて行く時なぞ、私が晩に持つて來て貰ふものなぞいふと、忘れない様にと長いことかゝつて紙切れに書きつけたりしてゐます。

考へて見れば彼女にも随分長い事世話になりました。花でも咲いて、私も旅行が出来る様になつたら、郡山こほりやまにでも連れてつてやらうかと思つてゐます。其時にはお正月にこしらへてやつた帶おびも初締めが出来るでせう。

あゝ何も彼も！ 住み馴れた所はそれが病院ですらも懐しい、四月は希望と艱難とをもつて私を迎へに來るけれど……けれども時よ、どうか私をもう

暫く世間からかくまつておくれでない
か。（三月末の日）

【入力者注】

底本は総ルビですが、ふり仮名は
一部のみ残しました。

「え」の変体仮名は「え」に置き
換えました。

以下の修正を行いました。

ちつとも行かなかった↓

ちつとも行かなかった」

底本…讀賣新聞

大正六(1917)年四月十五日朝刊

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年十二月九日

改訂…令和五年六月二十二日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)